

令和元年度全国高等学校総合体育大会 「審判員報告」

C2 女子審判長

大森 智子

1. 採点上打ち合わせた事項

(監督会議での報告事項も含む)

①適用規則の確認

採点規則2017年版変更規則I、女子体操競技情報28号及び高体連制定の高校適用規則を適用する。

②採点指針の確認

今年度の採点指針としてあげている「欠点のない美しい姿勢での正確な実施」、「確実な技の実施による完成度の高い演技」、「高いDスコアの演技」を全ての種目において採点上の重要項目とする。

③Dスコアへの質問に対して

高体連の特別ルールに則って、その班の競技終了後10分までに書面を審判長へ提出すること。また、時間に遅れた質問、Eスコアへの質問、他の所属への質問は受け付けられないという規則の確認。

④練習時間について

【予選】1組最大6名 (チーム4名+個人2名)

VT : 1人2本

UB : チーム 3分20秒、その後 個人2名 各50秒

BB : チーム 2分、その後 個人2名 各30秒

FX : 3分

【決勝】1組最大4名

VT : 1人2本

UB : チーム 3分20秒:個人 各50秒

BB : チーム 2分:個人 各30秒

FX : チーム・個人ともに 一組に2分

*チーム内に棄権者が出て人数が少なくなっても、チームに同様の時間が与えられる。

*決勝1班の最初の種目のみ5名の演技になるので、1人分の時間が追加される。

⑤情報28号の内容の確認

- ・過度なマグネシウムの使用、平均台の表面上への水の使用について

過度なマグネシウムの使用、例えば炭酸マグネシウムを撒き散らすような行為やマットやカーペットに足で擦り付けたり、助走路に炭酸マグネシウムで大きくラインを引いたりするなど容易に復元できないような行為は違反となるため、印をつける場合は、後から復元できるようにテーピングのテープ等で対応することを再度確認。

- ・落下による中断時間について

選手が落下時間の計測を開始することを避けるために故意にマット上から足を離している場合、規律のない行動として最終スコアから-0.30減点となるため、落下後、選手

の安全が確認でき次第、速やかに演技再開の準備を始めることを選手に再度確認してもらうよう促した。

・ 器械器具の準備について

練習の前の器械器具の準備は、次の種目の移動のコールが入ってから開始することの確認。

⑥ 競技中の演技台での練習はできないことの確認。

国内競技会ではマット上が演技台となるため、助走路を含むマット上での練習は演技中、採点中はできないため再度選手へ注意喚起を促した。

⑦ 演技中のコーチの行動について

採点規則にはコーチの行動の違反項目として「合図、かけ声、応援等でコーチが自分の選手を援助する」という減点項目がある。演技中に選手への指示や応援と見られるかけ声、拍手などは控えていただくよう監督へ促した。

2. 採点上起こった事項とその処理

① 得点入力システムのエラー

決勝第3班の競技の際、得点の入力システムに不具合が出たため、すべての種目の得点入力、選手名の表示、得点の表示が出来なくなってしまった。復興に時間がかかるということであったため、決勝第3班はすべての種目で審判員がジャッジペーパーに得点を記載、セクレタリーが集計をして得点用紙に記入をして対応した。選手名の表示、得点表示ができなかったため、D1審判が口頭で得点を伝えた。

② 演技中のコーチのかけ声（合図）

演技中に選手への指示となるようなかけ声や応援と見られるかけ声、拍手をする監督がいたため口頭注意にて対処した。（複数件）

③ Dスコアへの質問

全競技を通して、段違い平行棒で1件、平均台で6件、ゆかで5件、Dスコアに対する質問を受けた。Dジャッジに確認をとり、該当監督へ説明をした。

④ 競技エリア内に認められていないコーチ（引率教員）が入場したため、口頭注意の後、アリーナから退場の措置をとった。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会では決勝第3班の競技の際に、得点入力システムに不具合が出た関係で演技開始を遅らせてしまったり、得点表示や演技の開始のモニター表示ができず口頭での対応となったため、選手、監督の皆様にはご不便をおかけしてしまいました。近年、全国高校総体では開催県のご配慮により得点入力システムが導入され、そのお陰で採点業務もスムーズに進めることができ、大変助かっております。しかし、稀に機器の不具合などが起きることもあるため、それを想定した対応を考えておかなければならないと思います。今回は、機器の動作確

認や得点集計用紙の準備、集計方法の確認などに少し時間を割いてしまい、選手を待たせてしまう場面もあったため、今後は事前に万が一システムが動かなくなってしまう時の対応策を打ち合わせしておくことが必要だと感じました。

選手の演技を見て感じたことは、すべての種目において難度の高い技や組み合わせ点を獲得できる組み合わせに果敢に挑戦してきている選手が非常に多くなっているということです。日本の女子選手が世界の強豪国と戦うためには、高いDスコアを獲得することは必須といえます。高校生の年代は日本の女子選手を牽引していくべき年代であり、その年代の選手が高いDスコアを獲得すべく難しい技や組み合わせを演技に組み入れてきていることは、大変頼もしいと感じました。Dスコアを0.10上げるだけでも大変な努力と時間を要することだと思いますが、今後も諦めることなくトレーニングに励んでもらいたいと願います。

また、難しい技や組み合わせに挑戦している選手が多くなっていると感じたこととは裏腹に基本的な技や技を実施していない時の姿勢が疎かになっている選手も多く見受けられ、今後の課題であると感じました。段違い平行棒でスウィングをした時、平均台、ゆかで1歩2歩ただ歩いた時、ゆかのコーナーでポーズをした時に膝やつま先が緩んでいる選手やひねりを伴うジャンプを実施する際、ひねることに精一杯で上体の姿勢や手の位置が乱れている選手などが多く目につきました。高いDスコアを獲得するために高い難度の技が承認できたかできないか、ということは選手や指導者の皆さんが常に意識をされていることだと思いますが、技の難度が承認されたのかどうかだけではなく、その技がどのような姿勢で実施されたのかということや、立っているときの姿勢や歩いたときの足がどうなっているか、そういった基本的な動作や基本技の姿勢にも意識を持っていただきたいと思います。例えば、高い難度のターンを実施するとき、難度が承認されたのかどうかということばかりに意識がいていないでしょうか？ターンを実施しているときの浮足のつま先や上方にあげた手の位置、上体がどういう姿勢になっているか、意識を持たれているでしょうか。技の難度が承認されたのかどうかばかりに気をとられることなく、身体の姿勢についても視点を置いていただきたいと思います。長年実施している基本的な技のやり方を変えるということは選手にとっては非常に難しいことであり、基本技を修正することはかなりの時間を要することだと思います。特に新しい技に挑戦している最中は、どうしても新しい技の習得に時間をかけてしまいがちです。しかし、姿勢欠点があるままそれを見逃しては、最終的にスコアを上げることは出来ません。これまで長年採点の重要項目として挙げてきた「常に美しい姿勢での演技」ということを今後も採点の重要項目として挙げていきたいと思っています。選手、コーチの皆さんも技の習得に力をいれると同時に姿勢欠点のない美しい姿勢で演技することを目指して頑張ってください。

C2（跳馬）

D1 審判員 佐原礼香

1. 採点上打ち合わせた事項

①採点指針の確認（情報28号）

- ・Dスコアの高い跳躍技の実施
- ・姿勢欠点のない完成度の高い跳躍
- ・高さや距離を伴うダイナミックな跳躍
- ・着地姿勢が高く、安定した着地

②E 審判団の確認事項

- ・採点指針をもとに各審判員は各跳躍の理想像を持つ
- ・採点指針に沿わない実施の場合、採点規則の減点項目のいずれかから減点する

③適用規則（変更規則）の確認

- ・第 10 章 跳馬 「種目特有な実施減点」
支持局面 支持が長い -0.1/-0.3/-0.5
第二空中局面 ダイナミックさに欠ける -0.1/-0.3/-0.5

※ダイナミックさに欠ける跳躍については、跳躍の大きさから感じられる迫力だけではなく技の難易度から受ける迫力や雄大性なども加味し、第 10 章跳馬「種目特有な実施減点」の「ダイナミックさに欠ける-0.1/-0.3/-0.5」の減点項目に則り明確に差をつける。

④線審の確認

- ・練習回数のおえ方の確認
- ・ライン減点の確認

2. 採点上起こった事項とその処理

決勝の 3 班目の時に、得点入力、表示システムが全て作動しなかったため、E 審判はタブレットではなく採点用紙で対応し、得点表示が出来なかったため得点は口頭で伝えた。

3. その他特記事項・意見・感想

今大会に出場した選手の跳躍技は、前転とび（D スコア 2.00）からロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねり（D スコア 5.40）とレベルの差は大きかった。

予選に出場した選手 252 名中、最も多く実施された跳躍技は屈身ツカハラとび（D スコア 3.70）で 86 名（約 34%）の選手が実施していた。今大会は第二空中局面で後方伸身宙返り 1 回ひねり以上のひねりを伴う跳躍技（D スコア 4.60 以上）を実施した選手が 56 名（約 22%）で D スコアの高い跳躍技を実施する選手が増えた印象を受けた。

<予選出場選手 252 名の最も多く実施された跳躍技、D スコアの高い跳躍技>

跳躍番号	跳躍技	D スコア	跳躍人数(%)
3.20	屈身ツカハラとび	3.70	86 名(約 34%)
3.32	伸身ツカハラとび 1 回ひねり	4.80	25 名(約 10%)
4.32	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 1 回ひねり	4.60	21 名(約 8%)
4.33	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 1 1/2 回ひねり	5.00	4 名(約 1%)
4.34	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねり	5.40	6 名(約 2%)

決勝においては、出場した選手 82 名中、第二空中局面で後方伸身宙返り 1 回ひねり以上のひねりを伴う跳躍技を実施したのは 47 名（57.3%）で昨年の 53.6%を上回った。第二空中局面で伸身宙返り 1 1/2 回ひねり以上のひねりを伴う跳躍技を実施したのは 12 名（15%）で昨年の 15.6%とほぼ同じであったが、伸身ツカハラとび 1 回ひねりとロンダート後転とび～後

方伸身宙返り 1 回ひねりを実施した選手が 35 名（42.6%）で昨年の 35%を上回り、全体的に D スコア 4.60 以上の跳躍技に積極的に取り組んでいる姿勢がうかがわれた。

<決勝出場選手 82 名の最も多く実施された跳躍技、D スコアの高い跳躍技>

跳躍番号	跳躍技	D スコア	跳躍人数(%)
3.32	伸身ツカハラとび 1 回ひねり	4.80	20 名(約 24%)
4.32	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 1 回ひねり	4.60	15 名(約 18%)
4.33	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 1 1/2 ひねり	5.00	5 名(約 6%)
4.34	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねり	5.40	7 名(約 9%)

実施においては、全体的に大過失は少なかったが、D スコア 4.60 以上の跳躍技を実施した選手においては、支持局面で規定されたひねりの時期が早すぎる（台上）、第二空中局面で伸身姿勢が一直線でない、伸身姿勢が保てないなどの減点が見受けられた。更に着地が乱れてしまったり、着地をした際の頭の位置が腰より下がったりする実施が多く、E スコア 9.00 以上の選手が少なかった。D スコアが高い跳躍技になるほど第二空中局面や着地での姿勢欠点が見受けられてしまう実施が多かったので、日頃の練習から着地姿勢が高く安定した着地が出来るよう心がけて頂きたい。

また、高い D スコア 5.40 のロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねりを実施した選手は、姿勢欠点や着地姿勢の減点は見受けられたが、第二空中局面で着手からの高さ・スピードがあり、尚且つダイナミックな実施であった。

日本も D スコア 5.40 のロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねりを実施する選手が増えて来ているが、さらに多くの選手がより高い D スコアの跳躍技に挑戦して欲しいと思う。そのためには、選手が試合で挑戦する機会を与えることも必要だと思うので、今年度競技時間が遅れることが懸念されたが、予選・決勝とも変更規則通り跳躍回数を 2 回に戻せたことは選手強化の面から見ても発展的であったと思う。今後も予選・決勝ともにすべての選手が 2 回の跳躍ができる競技方法を継続して欲しいと思う。

C 2（段違い平行棒）

D 1 審判員 木村幸代

1. 採点上打ち合わせた事項

・情報 28 号「段違い平行棒」採点指針 3 項目を読み直し、指針に沿った演技を評価することを確認した。

- － 腕の曲がり、膝やつま先のゆるみのない美しく伸びた体線での実施
- － 空中局面を伴う技の大きさとひねりを伴う技の正確な実施
- － D スコアの高い演技構成

・指針に沿わない演技には、規則集 8 章の減点項目、11 章の「構成減点」「種目特有な実施減点」、そして変更規則 I にある「前向きでない構成」の減点を有効に使用し、採点を行うことを確認した。

- ・「短い演技」とD審判団が判断した場合、技の実施数によりEスコアの最高点が変わるため、その都度、E審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

- ・アシスタント（計時審）の任務内容を確認した。落下による中断時間の計測は、選手が落下後マットに立ち上がったときから始まるが、計測を開始することを避けるために故意に足から立ち上がらない場合の対応について確認をした。また、コーチからの計時減点の再確認にはすぐに対応できるように、過失はすべて記録しておくことをお願いした。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・「演技の間（審判員が前の選手のスコアを算出している時間）」での器械器具の準備を、コーチ・選手・他のコーチの3名で演技台に上がって行っていたため、口頭にて注意をし、2名で準備を行ってもらった。

（情報28号、練習時間の後や「演技の間」では、器械器具の準備（段違い平行棒では最大2名上がることができる）はできるが、使用することはできない。）

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会、D・E難度の空中局面を伴う技や棒間の移動技、D難度の終末技に積極的に取り組む選手が多く見受けられたように思います。また、CV（組み合わせ点）を獲得できる組み合わせに挑戦する選手も複数いるなど、指針に沿った演技構成に向けて、各選手の努力が伺える大会だったと感じます。今後も、高いDスコアの獲得を目指すとともに、け上がり・後ろ振り上げ倒立などの基本技を大切にしたい、体線の美しい体操を目指して欲しいと強く願います。

挑戦ゆえの失敗もいくつかありました。失敗し落下した際、どの技から演技を再開するかは難しい判断になるとは思いますが、再開した「技」から採点が始まります。「低棒け上がり」から演技を再開した場合、棒を握って走りながらけ上がりを実施すると、それは「低棒け上がりでの落下」と判断されます。また「低棒け上がり」の後、低棒にしゃがみ立ちをし「高棒け上がり」に続けた場合、「低棒から高棒へジャンプして移動」となります。「技」から演技を再開したにもかかわらず、不必要な減点をされてしまう実施が、この全国大会において複数あったことは残念でした。挑戦ゆえの失敗とは異なり、ルールを理解し、練習の段階から意識さえしていれば防ぐことができた失敗だと思えます。挑戦をやめることなく、正確な実施、完成度の高い演技、そして必要のない減点をされない演技に期待したいと思えます。

採点規則の変更、修正等は「情報」という形で通達されています。以前の大会では認められていたことが、認められなくなっている場合もあります。競技中の説明や注意は、演技にも支障をきたすかもしれませんし、時には減点という形で対応しなくてはなりません。気持ちよく演技をしてもらうためにも、選手自身が規則を知る努力をして欲しいと切に願います。

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認（情報 28 号）

「姿勢欠点がなく正確なダンス系の技の実施」「立ち姿勢も含め、常に美しい姿勢での演技」を最重視し、個々の技の実施だけではなく、演技全体として完成度の高い美しい演技を評価することを確認した。ダンス系の技の不正確な実施に対しては、「身体の姿勢の減点」「正確さ」の減点を厳密に減点すること、全体を通して身体の姿勢が悪い、膝つま先が伸びない演技に対しては、「演技全体を通して身体の姿勢が悪い」の減点項目に則り減点をし、指針に沿った演技とそうでない演技をEスコアにて明確に差をつけることを確認した。

(2) 短い演技についての確認

「短い演技」と判断した場合は、技の実施数によりEスコアの最高点が変わるため、その都度E審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

(3) アシスタント任務の確認

計時の任務内容（予選・決勝の練習時間の計り方、演技時間・中断時間の計り方）を確認するとともに、コーチから計時の減点の再確認の要求があった際に速やかに対応できるように、過失はすべて記録しておくことを確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

競技中、得点入力、表示システムの不具合が起き、使用することができなくなった。得点の入力についてはジャッジペーパーで対応したが、得点の表示をすることができなかった。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会においては、D難度以上のダンス系の技や組み合わせ点、シリーズボーナスを獲得できる組み合わせに挑戦している選手が多く見受けられた。また、開始技でD難度やE難度の技を実施する選手も以前より増え、多くの選手が高いDスコアの獲得を目指した演技構成に積極的に取り組んでいる印象であった。一方で、ダンス系の技の不正確な実施も多く見受けられた。ダンス系の技は不正確な実施により承認要求が満たされない場合、異なる技と判断される場合が多く、その結果、同一技の繰り返しとなり難度点や構成要求を獲得できなくなる場合も多い。選手やコーチには、各技の承認要求をいま一度確認していただくとともに、もし承認要求が満たされなかった場合にどの技として承認されるのかということも熟知していただきたいと感じた。今大会では技の実施順を変えることによって構成要求を満たすことができた選手も多く見受けられたため、確実に構成要求を満たせるような演技構成にしていきたいと思う。

演技全体としては指針に沿った体線の美しい演技も見られた一方で、膝つま先が伸びない演技、指先まで意識が行き届いていない演技も多く見受けられた。特に技を実施していないときの立ち姿勢、腕の位置や指先の意識、歩く際の膝つま先、座の動きを実施している際につま先、足を前や後ろに1歩出す際につま先など、常に意識されている演技とそうでない演技との差が明確だったように思う。特に平均台は立ち姿勢や歩く姿勢の美しさの差が顕著に

表れる種目であるため、高いDスコアを目指して技の難度を上げていくことだけでなく、美しい姿勢やダンス系の技の正確な実施も重要視されていることを念頭に置き、トレーニングに励んでいただきたい。

C 2 ゆか

D 1 審判員 黒須真希

1. 採点上打ち合わせた事項

1) 適用規則の確認

2017年版採点規則変更規則I、情報28号までを適用。

2) 採点指針の確認

指針をもとに、ゆかの演技に何を求められているのか理想像を持ち採点することを確認した。

3) アシスタント、セクレタリーの任務の確認

計時、線審ともに任務の確認を行い、必ず記録を残しておくことを確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

特になし

3. その他 特記事項・意見・感想等

今大会で気になったことは2つあり、1つはダンス系の技の不正確な実施が非常に多く、それに伴いDスコアが大幅に変わってしまう選手が多かったことである。多くの選手が予定している技として認められず、異なる技もしくは難度なしとなっていた。具体的には、「前へ脚交差した前後開脚とび 1/2 ひねり」を実施したが、ひねりが不十分で「前へ脚交差した前後開脚とび」と承認した選手が多くいた。これ以外にもひねりを伴うジャンプ、リープ、ホップの技を実施したが、難度が承認できなかった選手が非常に多かった。ひねりを伴うジャンプ、リープ、ホップの難度の承認は肩と腰の位置により決定される。選手自身がそれを理解し、意識して実施すれば予定通りの技として認められそうな選手はたくさんいたと思う。予定通りの技として認められなかった場合に構成要求に関わるが多く、実際に構成要求を獲得できなかった選手が複数いた。どの技の承認要求が何で、どうなるとどの技になるのか、ということを理解した上で演技構成を組めば仮に予定通りの技として認められなくても構成要求を落とすことはないため、改めて構成を見直す必要があると感じた。例えば、「前へ脚交差した前後開脚とび 1/2 ひねり」はひねり不足となった場合「前へ脚交差した前後開脚とび」となるが、この技だけでなく「前へ脚交差した前後開脚とびから輪」はアーチ姿勢と頭部後屈がないまたは後ろの足が肩より低い場合は「前へ脚交差した前後開脚とび」となる。このように承認要求を満たせない場合異なる技として承認されるため、「前へ脚交差した前後開脚とび」と「前へ脚交差した前後開脚とびから輪」で構成要求を満たそうとした場合に「前へ脚交差した前後開脚とびから輪」の後ろ足が肩より低くて「前へ脚交差した前後開脚とび」と承認され、同一技の繰り返しとなり、構成要求が獲得できないということになる。1つ1つの技を正確に行うことと、万が一のことを考えて演技を構成することを考えてほしい。

2つ目は、姿勢の悪い選手が多いことである。指針にもあるように立ち姿勢も含め常に美

しい姿勢で演技できている選手が少ないことがとても気になった。まず、ダンス系の技での姿勢の減点が非常に多い。膝、つま先が伸びない、開脚が不十分、ターンの軸が作れていない、ターンの浮足のつま先が伸びていない、上体の姿勢が崩れているなど、基本的な姿勢ができない選手が増えているように感じる。さらに、技以外のところを見ると立った姿勢で膝が伸びていない、背中が丸くなっている、頭の位置が悪い、一步出した足のつま先が伸びない、ステップのつま先が伸びないというように、技以外は意識が行き届いていない選手がとても多かった。美しい体線、ゆかから足が離れた瞬間からつま先を伸ばすというような体操の基本的な動作が演技の中で意識できていない選手が増えているように感じた。

体操競技はより難しいことを目指してDスコアを上げていくことはもちろん当たり前のことであり、現状より上を目指し続けることが大事である。しかし、美しさを追求することも体操競技では非常に大切であり、どちらかだけではスコアを上げていくことはできない。これから日本がさらに上を目指していくためには、高校生世代の選手がさらに力をつけていくことが重要である。現状は、基本の姿勢、美しい体線というところが少し欠けている選手が増えているように感じるため、来年のインターハイに向けて、姿勢の修正をしつつDスコアEスコアともに上げていけるように頑張ってもらいたい。